

2014年11月5日(水) 上小岩遺跡から柴又へ

—古代「葛飾郡大嶋郷」と近世「佐倉道」をあるく—

案内・資料作成：[藤由美](#)

- ①上小岩遺跡⇒②正真寺・庚申塔ばんどう道道標⇒③慈恩寺道道標⇒④水神碑⇒
⑤佐倉道⇒⑥八幡神社・地蔵像庚申塔⇒⑦医王寺⇒⑧浅間山噴火川流溺死者供養塚の碑⇒
⑨柴又八幡神社古墳⇒⑩真勝院・五智如来石像⇒⑪柴又帝釈天題教寺



上小岩遺跡（小岩親水緑道）と 出土した土器（S字状口縁台付甕型土器）



「水神」碑



柴又八幡神社古墳出土「寅さん埴輪」と「さくらさん埴輪」

奈良県の東大寺正倉院に残っている下総国・飾郡大嶋郷の戸籍（養老5年、721年）には、甲和里、仲村里、嶋侯里の三つの里があったことが記録されています。

確証はありませんが、甲和里は、弥生時代から古墳時代にかけての上小岩遺跡（北小岩6～7丁目）と推察されています。また、嶋侯里は帝釈天（題経寺）で有名な・飾区の柴又地域とされ、柴又駅北側の柴又八幡神社では石室と埴輪などを伴う古墳も発掘されています。

今回の史跡ウォークは、上小岩遺跡から江戸時代の「佐倉街道」を経て、柴又帝釈天まで歩き、古代大嶋郷ゆかりの二つの里の地を訪ねます。

1. 上小岩遺跡

○「遺跡通り」の文化財案内板

○小岩親水緑道（上小岩遺跡の碑・「昔の人々の暮らし」想像図パネル）

上小岩遺跡は北小岩6丁目の天祖神社から北小岩7丁目の上小岩小学校北側方面へ帯状に広がる遺跡と考えられています。昭和27年（1952）に当時小岩三中の生徒であった陳可成君によって発見され、同校の教員であった中村進氏によって以後30年間にわたって調査研究されてきました。

京成小岩駅から東へ「遺跡通り」を約250m位進むと、小岩親水緑道と交差します。

この緑道の道沿いが、発見当時に最も多く土器の採集されたところでした。立ち並ぶ両側の家の敷地から、軒並み大量の土器を採集しました。また最近の調査では、天祖神社東側の通り道路下から土坑が見つかり大量の土器が出土しました。小岩保育園前の道下には、古墳時代初期の竪穴住居跡とも思える遺構も見られました。この遺跡は、その後の発掘によって、弥生後期から江戸時代にかけての複合遺跡であることが明らかとなっています。

京成小岩駅近く「遺跡通り」の文化財案内板

<p>上小岩遺跡</p> <p>上小岩遺跡は、区内で最も古くて大きな遺跡とみられ現在の北小岩六・七丁目付近と推定されています。この地域は、もとの上小岩村にあたることから遺跡名を上小岩遺跡とよんでいます。</p> <p>上小岩遺跡は、昭和二七年に当時の小岩第三中学校の生徒が自宅裏の用水路から土器片を発見し、同校の中村教諭に連絡したことからその存在が知られるようになりました。その後、中村氏らの調査により、この遺跡が古墳時代前期（今から約一六〇〇年前）を中心とする低地の集落遺跡であることがわかりました。</p> <p>出土品は、弥生時代中期のものから発見されており、古墳時代前期の土器類が中心です。とくにS字状の口縁をもつ台付カメが大量に出土したほか、土錘も多く出土し、半農半漁の生活をしていたことがうかがえます。</p> <p>また、奈良の正倉院文書に養老五年（七二二）の下総国葛飾郡大嶋郷の戸籍があります。この中の甲和里という集落が小岩にあたりと推定されていますが、これまでの調査でこれを裏づける集落跡が発見されていません。当時の出土品も少ない為、戸籍に見られる集落の存在確認は、今後の調査に期待されています。</p> <p>昭和六十三年三月 江戸川区教育委員会</p>

○鶴の湯

伝統的な宮型造りの銭湯で、昭和三十年代後半に建築されたとのこと。



↑ 鶴の湯 ↓ 馬頭観音塔

○馬頭観音塔

旧岩槻街道の辻に、「馬頭観音」と彫られた平成元年の再建の石塔が祠にまつられています。

馬頭観音は、観音菩薩の**へんげしん**変化身の1つですが、近世以降、馬が移動や荷運びに使われることが多くなったことに伴い、馬の供養のため、街道筋や馬捨て場に、馬頭観音の石塔が建てられることが多くなりました。



↓ 庚申塔ばんどう道石造道標

2. 正真寺 神明山西光院（真言宗豊山派） 北小岩 7-27-5

開山は**しょうしんじ**暁覚法印（慶長6年、1601没）です。法印は天文・永禄の国府台合戦に加わった里見方の武士でした。のちに世の平安を祈願して剃髪し、阿弥陀如来の木像を刻んで戦場の跡に堂宇を建てたのが、この寺の始まりといわれています。

昭和42年（1967）江戸川堤防改修で、現在の位置に寺所を移動し、本堂も萱葺きから銅板葺きになりました。

○小岩田の庚申塔ばんどう道石造道標（区登録有形文化財）

享保8年（1723）に建立された**しょうめんこんごうぞう**青面金剛像庚申塔で、脇に**ばんどう**坂東道（岩槻の慈恩寺への道）を示すとみられる「これより左はばんどうみち」と刻まれています。



○真田周作筆子塚（区登録有形文化財）

正真寺墓地にあります。「真乗院蓮月暁水居士／貞全院栄仙妙供大姉」と刻まれています。



↑ 真田周作筆子塚

寺子屋師匠の真田周作夫妻の墓と伝えられているものです。

○隆純地蔵尊

昭和17年から32年に遷化されるまで正真寺住職をつとめた田島隆純氏は、長く大正大学教授（昭和3年）であり、仏教学者として知られ、昭和24年から巣鴨拘置所の教誨師もつとめました。

この地蔵尊は、昭和33年その一周忌に、和尚の徳を慕う人びとによって建てられました。

3. 慈恩寺道の石造道標 (区登録有形文化財) 北小岩 8-29

正徳3年(1713)に建立されたこの地蔵菩薩像の供養塔には、右面に「これより右岩付慈恩寺道、岩付まで七里」、左面に「これより左千住道、千住より弍里半」とあり、この慈恩寺などを示す道しるべがあります。

慈恩寺は、埼玉県岩槻市にある天台宗の古刹で平安初期、慈覚大師の開基と伝えられ、千手観世音菩薩を本尊としています。坂東三十三観音霊場十二番の札所で、各地から巡礼の参詣者が集まりました。



慈恩寺道の石造道標→

4. 水神碑と善兵衛樋 北小岩 8-26-15 先

北小岩 8 丁目、上小岩親水緑道の最上流の北側に、高々とそびえる碑が石井善兵衛の功績をたたえる「水神碑」です。

明治初期、このあたりの上小岩村・中小岩村・小岩田村(以上、江戸川区)・鎌倉新田(・飾区)の4か村では、灌漑用の水が不足しがちでした。ひとたび日照りに見舞われると、たちまち田畑は荒れてしまいます。

上小岩村の石井善兵衛は、目の前を流れる江戸川から用水をひくことを思いたち、「寒暑ヲ問ハズ、風雨ヲイトハズ、東奔西走勸説コレ努メ」た結果、明治11年5月、4か村へ水を引く^{いりひ} 樋(水の取り入れ口)と用水路を完成させ、4か村を日照りから救ったのです。

東京府知事は善兵衛の功績を賞してこの樋を善兵衛樋と名づけ、また地元の人たちはこの碑を建て、彼の功をたたえました。裏面に善兵衛の事績を刻んでいます。

役目を終えた今、用水路は上小岩親水緑道として生まれかわりました。

5. 佐倉道(「親水さくらかいどう」)

五街道の一つの日光道中に付随する「水戸^{みと}佐倉道」で、幕府も重要な街道として重視し、早くから小岩に関所をおきました。千住^{せんじゆしゆく}宿で日光道中と分かれ、葛飾区新宿^{にいじゆく}で水戸街道と分かれて、^{まがりかね} 曲金(高砂)、鎌倉から小岩に至り、佐倉城までの街道です。

佐倉道は、佐倉の堀田氏をはじめとする房総の諸大名の参勤交代路ですが、この街道を経由して成田山新勝寺へ向かう成田参詣が隆盛するに従い、文化年間頃より「成田道」「成田街道」という愛称で呼ばれるようになりました。

今回は、親水緑道として整備された「親水さくらかいどう」(江戸川区)～「さくらみち」(葛飾区)沿いを歩きます。



↑ 佐倉道(「親水さくらかいどう」)

6. ^{はちまんじんじや}八幡神社 北小岩 8-23-19

創建は不詳、旧小岩田村の^{ちんじゆ}鎮守で、^{ほんだわけのみこと}誉田別尊をまつります。



○八幡神社所在の地蔵菩薩像庚申塔（区登録有形文化財）

万治元年（1658）の銘をもつ、区内最古の庚申塔で、八幡神社境内拝殿脇の地蔵堂に祀られています。^{さんやじぞう}三谷地蔵として親しまれている石造の地蔵尊ですが、銘文に庚申供養のために造立したと刻まれています。もと江戸川河川敷にあったこの地蔵堂は、江戸川堤防改修のたびに移動し、現在の場所に建て替えられました。

八幡神社所在の地蔵菩薩像庚申塔

○^{こいわださんや}小岩田^{ねんぶつこう}三谷の念仏講（区登録無形文化財）

旧小岩村の三谷に伝承されている念仏講で、毎月5日が「お大師さま」24日が「お地蔵さま」の日で、12月を除き月2回行われています。念仏は、真言宗豊山派の勤行方式ですが、^{しょうみょう}声明と^{わさん}和讃に、南^く飾の節回しなど古い形を残しています。



○^{きたはらはくしゅう}北原白秋歌碑

八幡神社の境内、鳥居をくぐってすぐ右手にあります。白秋はふたりめの妻 ^{えぐちあやこ}江口章子とともに大正5年6月から約1年間、当時の小岩村三谷の乾草商富田家の離れを借りて住み、^{しえんそうしや}紫烟草舎と名づけました。滞在期間はわずか1年でしたが、ここで短歌雑誌「煙草の花」を創刊したほか、数多くの短歌や詩など創作活動の素材を得ました。

北原白秋歌碑↑

昭和36年（1961）、地元小岩町（現在北小岩）の人びとは小岩（葛飾）の風土や人情を愛した白秋をしのんで、土地の鎮守八幡神社の境内に歌碑を建てました。

いつしかに夏のあはれとなりけり 乾草小屋の桃色の月



蕎麦地蔵尊像↑

7. ^{いおうじ}医王寺 薬王山瑠璃光院（真言宗豊山派）葛飾区柴又 6-13

本尊は薬師如来。応永14年（1407）、仁和寺の観見により、そのころ流行した赤目病平癒の祈願所として建立されたという言伝えがあります。

建立後間もなく、小田原の北条氏と安房の里見氏が利根川（現在の江戸川）を挟んで対峙し、北条方の陣屋として使用されたため、什物の大部分が失われましたが、天文7年（1538）^{げんしん}源珍により中興されました。源珍没後はふたたび無住となり多くの資料が散逸したそうです。古老の話では、近世の医王寺は、現在の料亭「柴又川甚」近くの江戸川流水上の地点にあったとのことで、堤防再建工事で現在地へ移ったとのことです。

○^{そばじぞうぞん}蕎麦地蔵尊像

昭和11年境内に祀られ、戦前から昭和四十年代にかけて、東京都麺類共同組合などの蕎麦店を中心とした組合から篤い信仰を受け、正月や地蔵縁

日には、医王寺近隣の人々のために、無料で蕎麦のふるまいが盛んに行われていたそうです。

8. ^{あさまやまふんかかわながれできしやくようづか} 浅間山噴火川流溺死者供養塚の碑 (葛飾区指定有形文化財)

天明3年(1783)7月5日から8日にかけて信州浅間山が大爆発を起こし、関東地方一帯は大きな被害を受けました。利根川上流の吾妻川では山津波と降灰でできたダムが決壊し、下流は大洪水となり、死者2000余人、埋没戸数1800戸に及びました。特に利根川、江戸川流域の水害は大きく、最下流にあたる当地域も同様に上流からの川流死者も少なからず漂着しました。この碑は、柴又村の人々がその供養のために建てたもので、史上まれに見る大災害に対処した当時の様子を伝えています。

正面に「南無妙法蓮華経 川流溺死之老若男女一変死之魚畜等供養塚」、左側に「天明三癸卯歳七月十八日 武州葛飾郡東・西領柴又村 経栄山題経寺九世貞享院日敬造立」、右側に「施餓鬼發起人」として斎藤氏ほか数名の人名が書かれています。

江戸川区にも、下流の小岩の善養寺裏に、下小岩村の人々が、寛政7年(1795)その十三回忌に建てた供養塔があります。



浅間山噴火川流溺死者供養塚の碑↑

9. ^{しばまたはちまんじんじゃこふん} 柴又八幡神社古墳 (葛飾区柴又3-30)

東京低地に築かれた横穴石室と埴輪を伴う古墳時代後期6世紀末～7世紀初頭に築かれた古墳です。

昭和40年新社殿造営工事に伴い、破壊された石室の実測と金属製品の採集が行われ、その後、昭和63年度から平成15年度まで6次の発掘調査が行われました。

この古墳は、推定全長30m程度の前方後円墳で、神社社殿の北半分が後円部墳丘、前方部はそこから西北西方向に伸び、墳丘周囲には幅4～6m、深さ2mの周溝が、墳丘の裾には主に円筒埴輪からなる埴輪列が周っています。

平成10年からの発掘調査で、人物・馬形などの形象埴輪が、北側くびれ部付近の周溝からまとまった状態で検出されています。

「寅さん埴輪」などこれらの形象・円筒埴輪224点は、下総型に属するもので、分布の最西端にある重要な資料として、2011年、土器14点と金属製品21点と共に、東京都指定文化財になりました。

なお、神社本殿床下に保存された石室(葛飾区史跡)の石材は、法皇塚古墳(市川市)、赤羽台古墳群、将軍山古墳(行田市)と同じ千葉県鋸山付近の海岸で産出された房州石です。



柴又八幡神社古墳の石室

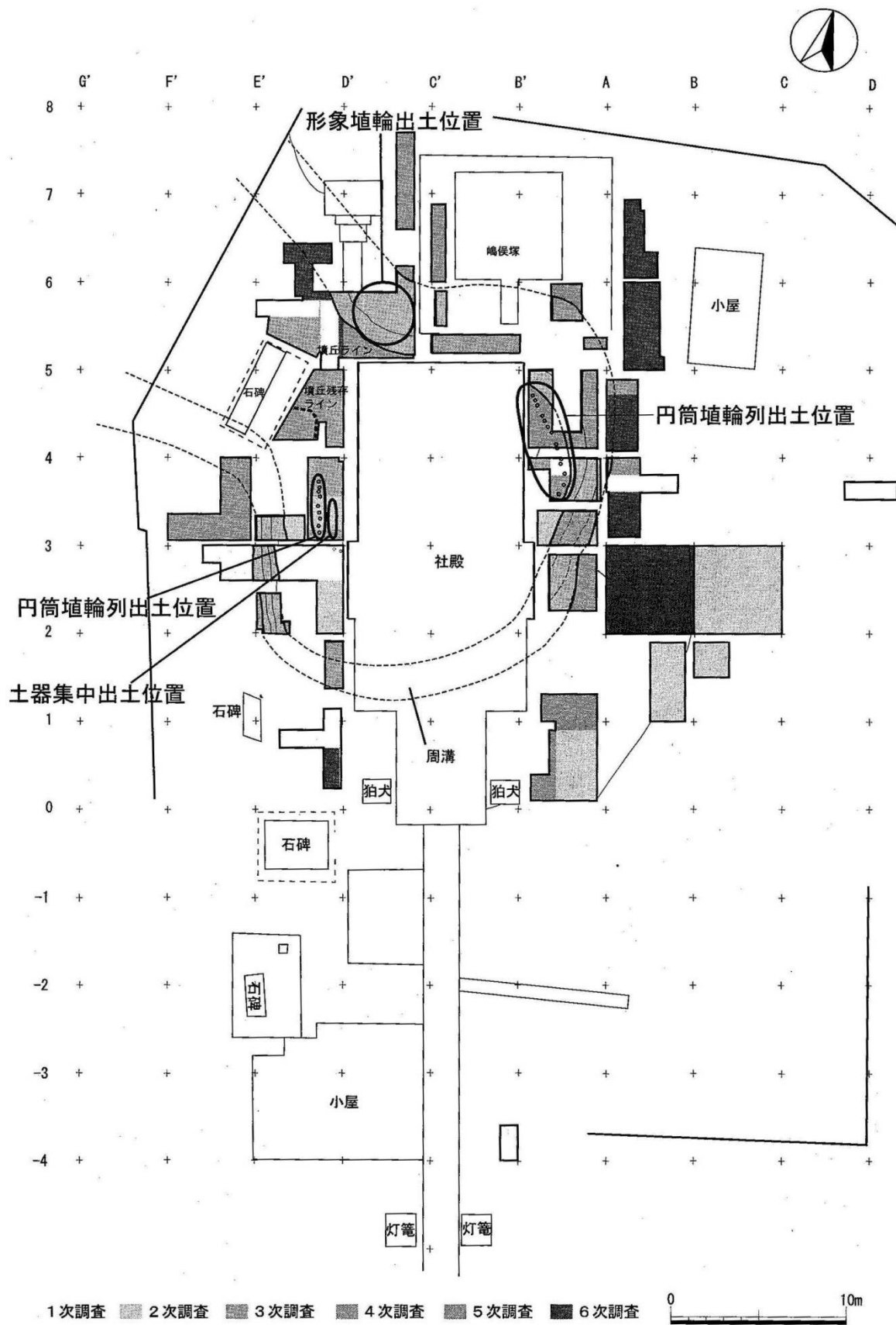


図 I -2-2 第 1~6 次学術調査における資料出土位置

10. 真勝院・五智如来石像

真言宗豊山派 柴又 7-5-28

大同元年(806)の創立と伝えられる古刹で、江戸時代まで、柴又八幡宮を管理していました。

五智如来石像は、万治3年(1660)柴又村の名主濟藤次良衛門と相模伊勢原村の鳥居九良左右衛門等により、逆修供養のために建てられたものです。(葛飾区指定有形文化財)

→五智如来石像



11. 柴又帝釈天 日蓮宗 経栄山題経寺 柴又 7-10-3

通称「柴又帝釈天」は、寛永6年(1629年)に、禅那院日忠および題経院日栄という2名の僧によって開創された日蓮宗寺院、題経寺のことです。

安永8年(1779年)9世住職の日敬が、一時行方不明になっていた「帝釈天の板本尊」を再発見、その日が庚申の日であったことから、帝釈天の縁日は60日ごとの庚申の日とされ、庚申信仰とも関連して「柴又帝釈天」として多くの参詣人を集めるようになりました。

近代以降も夏目漱石の『彼岸過迄』を始め、多くの文芸作品に登場、20世紀後半以降は、人気映画『男はつらいよ』の寅さんゆかりの寺として知られるようになり、年始や庚申の日(縁日)はたいへん賑わいます。

○二天門の増長天・広目天像

二天門は入母屋造瓦葺の楼門で、明治29年(1896年)の建立です。

左右に安置されている増長天および広目天の二天像は、南都七大門にひとつ、大安寺山門にあった平安時代の仏師定朝作とされています。明治になって奈良の蓮長寺に移され、二天門の建立時に同じ日蓮宗の妙国寺(大阪府堺市)から寄贈されたものです。



二天門

○題経寺(柴又帝釈天)諸堂内及び二天門 建築彫刻一括 (葛飾区登録有形文化財)

帝釈堂(大正4年建立)、祖師堂(昭和30年建立)、二天門(明治29年建立)の内外は多くの木彫の浮彫装飾が施されています。

特に帝釈堂の木彫装飾は、法華経説話を題材にし、設計林門作、棟梁坂田溜吉の指導のもとに彫刻師10人が結集して行われ、大正6年(1917)に着工、大正12年の関東大震災では集めた檜材を失うなどの困難に遭遇し、昭和9年(1934)に完成しました。なお、これらの彫刻を保護するため、内殿は建物ごとガラスの壁で覆い「彫刻ギャラリー」として一般公開されています。



帝釈堂 ↑